

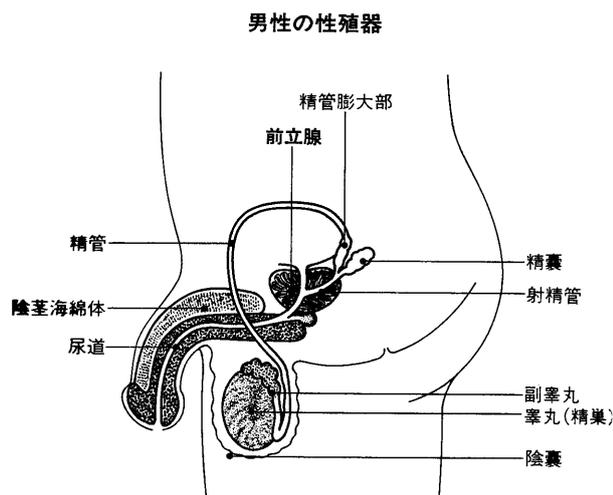
1998年の本。

体内に侵入しても当座はまったく何の障害も起こさないのに、その物質が一〇年、二〇年という長い年月のあいだ蓄積されたままでいて、やがて生物の生命力を奪うような作用をし始めるものが存在することがわかってきた。

しかもそれは、生命体が繁殖をつづけるために不可欠な性の機能に、致命的な障害をあたえる作用である。となると、生物の繁栄はそこで終わりになる。気づかぬうちにじわじわと生殖の根源が揺さぶられる恐怖に、人々は愕然とした。

「環境ホルモン」の登場である。正式には「(外因性) 内分泌攪乱化学物質」といって女性ホルモンのエストロゲンと類似した作用のある物質だ。これが生体に入りこむと、本来のホルモンとそっくりの働きをし、生態の営みを混乱させてしまう。

体内に侵入すればすぐ急性の症状が起きる毒物であれば、まだ早い対策の手が打てる。危機意識も高まる。だが、じわじわと生殖能力を奪っていく。



もっとも多量の精子を確保するには、全年齢を平均して七〜一〇日に一回の射精がいちばんよくて、それ以上いくら禁欲しても精子はふえないということだ。

これが「停留睾丸」だ。

意外と多いもので、新生児の三分の一、未熟児の三分の二にこの種の下降不全が見られる。袋だけあって中身がないわけだが、とくに痛みもないので気づくのが遅れる。お母さん方はせめて一度は、わが子の陰囊に両方ともちゃんと畢丸がおさまっているかどうか、確かめていただきたい。この停留睾丸が環境ホルモンの作用によってふえると見られているのである。

肝心の睾丸が途中で停滞してしまうというのに、鼠径部(ももの付け根の部分)のせまい通路をとおって、小腸などが皮下に出てしまう病気もある。ヘルニアといわれるもので、俗に脱腸ともいう。締めつけられるため、腸が脱出したまま元に戻らないで血液も流れなくなると、嵌頓(かんとん)といって危険な状態になる。

男性の睾丸を摘出することが去勢とと思っている人が多いが、卵巣を摘除することも去勢だ。睾丸を両側ともに取れば、男性ホルモンの分泌が減るから、勃起不全、あるいはヒゲや胸毛のような男性型の体毛の消失などがあらわれてくる。もう一つ重要なことは「男らしさ」の喪失だ。

・・・

有名な古代中国の「宦官」である。

当時の宮廷の後宮（后、妃、女官などの住む奥御殿）に仕える男性の睾丸を摘除して、男性的な行動ができないようにした。当然、身体的特徴も女性化して、**皮下脂肪の発達した皮膚のつやつやした男性ができあがった。**

統計によると（『日本人の陰茎の平均値』永田正夫調査）、その大きさは平常時で（カッコ内は勃起時）長さ七・四センチ（一二・七センチ）、周囲八・三センチ（一一・五センチ）となっている。

・・・

陰茎の役割はたんに精液を女性の膈内に送りこむだけの道具で、**精子生成やホルモン分泌にはまったく関係ない**といったが、この精液の通り道に問題があると、精液自体には精子数などまったく正常でも、膈内にそれを送りこむことが不可能になる。

その代表例が**尿道下裂**（症）で、近年、新生男児に増加していることから、この病気も環境ホルモンとの因果関係が注目されている。

もっとも、この**尿道下裂は男子外陰部奇形の中ではかなり頻度の高い**もので、ふつう尿道口は亀頭の先端部中央に縦に走るみぞに開いているが、この病気の場合には、みぞだけが浅く残り、尿道は陰茎の裏側の亀頭の下面、あるいは陰茎の根元で終わるような状態になる。

要するに、**尿道が陰茎の先端までとおっていない状態**なのだ。当然、排尿を中心としていろいろ障害が起きる。停留睾丸、ヘルニアなどを合併することも多い。

尿道が亀頭下面に開口するような軽いものときには、亀頭の形がやや扁平になるだけで、当人も自覚しないことが多く、機能的には何の障害も起きないのだが、開口部が陰の根元のほうに下がるにしたがって、陰茎が小さくなったり、立ったまま排尿すること困難になるなどの症状が強まることになる。

さらに病状が高度になると、陰囊が左右二つに分裂して、女性の大陰唇のようになり、開口が会陰にまでおよぶと外観は男女の区別がむずかしい半陰陽の状態に似てくる。半陰というのは俗にいう「ふたなり」のことで、**先天的に性器の形が男女いずれとも判別しにくい状態**をいい、真性の場合には睾丸と卵巣の両方を同時にもつという状態になる。

このような状態では、成人しても男性あるいは女性としての機能は完全に混乱したままだが、軽い尿道下裂の場合には、男性としての性腺の働きは正常でも、射精した精液を膈に放出することが困難になる。

幼少期に陰茎の正常な発育を促すとともに、学齢期に入ったら手術を行なうなどの治療必要だから、乳幼児の段階で親がよく異常の有無を確認しておくことが大切である。

人間の体には、体外から細菌やウイルスなどの病原体が侵入してくると、これに対抗するために特異的なタンパクをつくって、侵入を妨げようとする働きがある。

これを免疫反応といい、侵入する異物を「抗原」、対抗するタンパクを「抗体」というが、女性の中には、膣内に射精された精子にたいして、この抗体ができて、子宮から卵管にむかって泳いでいる精子に結合して、その運動を妨げる現象が起きることがある。

ホルモンという成分は体内の内分泌腺から分泌されるが、汗や消化液などと違って、特別の導管（パイプ）をとおらず、**直接、血管などに入っていく**。多くの内分泌腺から各種のホルモンが分泌され、現在、五〇種以上が確認されており、いずれもきわめて微量であるにもかかわらず、内臓の働きをコントロールしたり、体の発育・成長を促すなど、重要な働きをしている。

・・・

ホルモンというと性ホルモンを連想する人が多いが、前述のように性に関係あるものはごくわずかしかない。問題の環境ホルモンはこの性ホルモンの中の女性ホルモンと同じような働きをもつものであって、**どういうわけか男性ホルモンと類似の作用をする化学物質はまだ見つかっていない**。

環境ホルモンが人間にもたらすと見られる障害はいろいろあるが、比較的若い女性にとって不安なのは**子宮内膜症**だ。

これは**子宮内膜炎**と似たような病名なので、素人にはまぎらわしいが、本質的にまったく別の病気である。

内膜炎のほうは、ほとんどの場合、病原菌が膣から子宮にむかって感染が進んだことによって、子宮内膜に炎症が生じた状態であり、分娩、流産、人工妊娠中絶などの後に、**内膜にできたキズから病原菌が侵入して起きることが多い**。

分娩時に各種の細菌の感染によって起きる熱性疾患を、まとめて「産褥熱」といい、昔からよく知られている疾患群だが、子宮内膜炎もその一つ。抗生物質などによって比較的簡単に治せるが、もういっぽうの子宮内膜症のほうは、ちょっと面倒な病気だ。最近では、出産経験のない若い女性にこの病気が急激にふえている。

簡単にいうと、生理のときに少しずつ**逆流した血液が、体内に吸収されずに卵巣や卵管、子宮の外側などに溜まって炎症や癒着を起こす**病気で、激しい生理痛のかげにこの病気が隠れていることが多い。

子宮の内面は粘膜でおおわれ、これを子宮内膜といい、性成熟期の女性の場合は、女性ホルモンの影響を受けてさまざまな変化を生じ、最終的にはこの内膜の一部が剥がれることによって出血が起こる。これが毎月の生理現象である「月経」である。

このように子宮内膜は性周期に一致して**増殖、出血、再生をくりかえすため、いろいろと障害を起こしやすい**。この子宮内膜の組織が子宮腔以外の場所、たとえば子宮の筋肉層の中、あるいは子宮以外の卵巣などに飛火して発育、増殖したものが子宮内膜症だ。

子宮の筋肉層にできたものは「**子宮腺筋症**」といい、子宮は大きくなってコブをつくるが、同じくコブをつくる病気でも、**良性腫瘍である「子宮筋腫」とは本質的に異なるもの**

である。ただ、ひじょうによく似ているので、臨床段階で医師が診断をまちがえることも少なくない。

ビスフェノール A 環境ホルモン

フタル酸エステル

ポリスチレン

ドライクリーニング テトラクロロエチレン (PCE)

もう一つ台所仕事で注意したいのは、プラ容器の使い方である。原則はなるべく低い温度で使うことと、長いあいだ食品を入れておかないことの二点だ。ことに**プラ容器に入れたまま電子レンジでチンしないこと**。ラップをかけるのもやめたほうが無難。ことに肉類などの油性食品に塩ビ系の材質を使ったラップをかけると、ラップの柔軟剤に含まれるアジピン酸エステル（環境ホルモンの一種と考えられている）などが**油分と化学反応を起こして、食品に溶け出しやすくなる**という。

その昔、「カンフル」という薬が、弱まった心臓の動きをふたたび活発にするということで、臨終のさいなどに当然のように使われていた。

・・・

世界の先進国では誰一人認めない薬——それがわが国では独り歩きして、やがては「**カンフル注射**」という表現は「起死再生の妙手」といった意味で用いられる国語の一つにまでなってしまったのである。それがいつの間にか、うやむやになって、知らぬうちに健康保険の薬値基準からも消え去ってしまった。

●染色体異常によるスーパー男性、スーパー女性とは

さて、XXなら女性、XYなら男性というのが、性染色体の組み合わせの原則だが、かならずしも原則どおりにはいかないから、問題は複雑になってくる。

正常な男性であるXYにもう一つYがくわわった「**XY²**」という染色体構造になると「スーパー男性」が誕生する。

性格は男性の攻撃的な一面が強く強調される。

反対に、もう一つXがくわわって「**XXY**」となると、男性でありながら思春期になると乳房が発達し、性格はものごしやわらかで女性的な態度をとるようになり、女性よりも、同性である男性に関心を示す。

これは**クラインフェルター症候群**として知られている。

一方、女性のほうも、正常ならXXだが、これにもう一つXのくわわった「トリプルX」になると、“スーパー女性”とでもいうか、ふつう以上に色気のある女性になる。反対に、Xが一つ足りない「X0」（エックス・ゼロ）となると、背が低く妊娠能力をもたないターナー症候群という状態になる。

こうして見てみると、染色体が、性にいかに重要な意味をもっているかがわかる。